



「環境」と「経済」が両立した社会を目指して 即戦力の学生を育成し、世の中を変える！



千葉大学大学院人文社会科学部教授

倉阪 秀史
くらはさか ひでふみ

2004年に、大規模な国立総合大学としては日本で初めてISO14001（環境ISO）を取得した千葉大学。実は、このISOの取得は、環境ISO学生委員会の学生が主体となって進められています。今回は、この学生委員会の指導教員である倉阪秀史先生に、学生の活動や、ご自身の研究である「環境政策」についてお話を伺いました。

【PROFILE】

三重県伊賀市出身。千葉大学人文社会科学部研究科教授。環境庁に11年勤務ののち、研究を続けるべく千葉大学へ。エコロジカル経済学の研究とその理論に基づくさまざまな政策提言を精力的に行っている。趣味はマラソン。全国さまざまなマラソン大会に出場している。

年間二千km以上を走破！ 走る名物教授

先生は積極的にツイッターを（@sustainablezone）行っているんですよ。〇〇にやうなんて可愛らしい表現で、マラソン大会の様子などが拝見でき、興味深いです。

マラソンを始めたのはこの6年くらいなのですが、かなりハマっています。年間で100kmマラソンは3〜4回、フルマラソンは6〜8回くらいは参加しています。名古屋から金沢まで、270kmを走るマラソン大会も完走しています。忙しい時は別ですが、基本的には自宅と大学の往復も走っておりまして、これが良いトレーニングになっています。

マラソンの時には忍者服で参加するという噂を聞いたのですが……

はい、忍者服で走っています。もともと、伊賀の出身ですから自称「忍者の末裔」なんです。それに、仮装してマラソンしていると、沿道の人の声援がひととき大きな声です。やっぱり応援してくれる人がいると楽しいですよ。

ツイッターでは、学生とも積極的に交流していますね。

ツイッターなどのさまざまなインターネットメディアは、ここ何年かで急激に進化しています。生で記者会見を見ることができると、マスコミが発表する情報だけではない、さまざま

な形の情報を得ることができるようになりました。これはとても大きなことです。情報に振り回されることなく、きちんと使えれば大きな武器になると思います。

学生主体の活動が 社会を変革する力になる

環境ISO学生委員会についてもっと詳しく教えてください。

これは普通教育科目の「環境マネジメントシステム実習」を履修している学生によって構成する委員会です。千葉大学では、国立大学法人になるのをきっかけに、2004年から環境マネジメントシステムを導入し、今では、西千葉、亥鼻、柏の葉、松戸の全ての主要キャンパスで環境マネジメントシステムの国際規格ISO14001を取得しています。千葉大学では、この取得と維持を学生の実務教育の一環として単位化しています。これは、千葉大学方式と呼ばれて、他の大学にも広がっています。

学生委員会は、対外的に活動の幅を広げるために2009年4月にNPO法人格を取得しました。理事長以下すべての役員を学生が務めるNPO法人です。学生が法務局や税務署に書類を提出に行きます。税金を納めるために企業から届いたサンプル品に関するアンケートを取りまとめる「サンプリングイベント」や環境報告書の第三者意見の執筆などを通して収入を得ています。こういった実際の社会、企業活動に近いことを学生のうちに行うことで、社会に役立つ、即戦力になる人材を育成できるのだと思います。

素晴らしい取り組みですね。でも、学生を導く先生は大変なのではないでしょうか？

いえいえ、私がしたことと言えば、「学生が集まる場所を作る」ことくらいです。机と椅子、コピー機、パソコン、インターネットにアクセスできる環境など、業務に必要なことを揃えておいたら、学生が自発的にさまざまな仕事をやるようになりました。実習の単位は年間2単位なのですが、単位目的ではないやりがいを感じて、活動が行われていると思います。それだけ学生の意識と能力が高い



ののだと思います。人と顔を合わせて、会話をし、議論をすることが、彼らにとって大きな収穫になると思います。実際にNPO法人のメンバーは、夏休みも冬休みも関係なく、自主的に集まって活動を続けています。私は指導教員という立場で、傍で見ているのですが頼もしいと思います。

研究を通して提言し、 社会を変革させよう！

そもそも、倉阪先生が千葉大学に来たきっかけは何だったのでしょうか？

私は学生の時に経済理論を学び、「今の主流となっている経済理論では、環境問題を扱えないのではないか」という思いを抱くようになりました。就職と進学の方々の選択肢があったのですが、環境庁（今の環境省）が採用してくれるというのでまず環境庁に入りました。環境庁では、「環境基本法案」や「環境影響評価法案」など、今の環境政策の基本となる法案を作る仕事などをやっていました。そろそろ大学に戻りたいと思って千葉大学に来たのは1998年です。「経済」と「法律」の両方を研究できる場所であり、環境に配慮した経済理論に基づく政策提言を続けたいと思っていた私にはぴったりの場所だと思いました。

千葉大学に来た時の印象は？

初めに思ったのは、学生があまりギリギリしていないな、大人しいなというところ。けれども、実際に接してみると個人個人の能力は高く、しかもマネジメント能力も高い学生がたくさんいることがわかりました。それは、ISO学生委員会の顧問をすることで、より強く感じるようになりました。

先生の研究テーマでもある「環境」について教えてください。

私が提言しているのは、持続可能な社会を実現するためにモノ

の使い方とエネルギーの使い方の方の双方を見直すことです。例えば、モノの所有権を消費者に売り渡すのではなく、所有権は生産者が保持したままサービスを売るビジネスに転換することを提言しています。そうするとモノの廃棄まで生産者が責任を持つようになるので、大量生産・大量廃棄社会は終わります。エネルギーについては、石油石炭など枯渇性の資源から、太陽光や地熱、風力、水力など再生可能なエネルギーへと移行することが必要です。3・11の大震災後、日本人の意識は大きく変わりました。今が転機です。一人ひとりの意識が変わらなくてはならないと思いますし、そのためにできることをしなければという思いです。

また、大学の研究とは別に、法案作成講座という自主講座を開講しています。関連のNPOなどと一緒に毎年一本、模範の法案を作成しています。法律や社会の仕組みが整備されれば、必ず人の行動も変わります。変えようと思つて変わらない社会などありません。タイミングを見ながら、適切な政策を提言し、より良い社会づくりに役立ちたいと思います。

最後に千葉大生にひと言メッセージを！

若いうちはもつとギリギリしてもいいと思います。「俺が世の中変えてやる！」でもいいし、「金を儲けてリッチになろう！」でもいい、小さくまとまらずに大きなことを描いてください。変えたいという気持ちがあれば、自分も、周りも、社会でさえも変えられるものです。「何とかなる！」と自分に言い聞かせ、より高いところを目指して羽ばたいてください。



in 2011 Autumn
創立120周年

薬学部が亥鼻キャンパスに移転しました



千葉大学薬学部は、平成22年7月に開学120周年を迎えました。そして平成23年秋には医薬系総合研究棟Ⅱ（新棟）の竣工に伴い、千葉大学薬学部は西千葉キャンパスから亥鼻キャンパスへ全面移転いたしました。

新棟の完成により亥鼻キャンパスには本学の医療系の学部、大学院及び研究施設の機能が集中することになります。医学部、同附属病院、看護学部、真菌医学研究センター等との緊密な教育研究の連携体制を一層深化させることができ、教育研究活動のますますの効率化をはじめ先端医学薬学研究者や医療系高度専門職業人の人材育成に大きく寄与するものと期待されています。

亥鼻ブランドの創出を目指して

薬学研究院長 西田篤司



今回、この移転に際し、多くの皆様から温かいご支援をいただきましたことに心より感謝申し上げます。

千葉大学薬学部は、教員60名、一学年の学生数80名というアットホームな学部です。有機系、生物系、物理系の薬学基礎研究を行う研究室と、臨床系の研究室が丸となって教育・研究に当たっています。各研究室のスタッフは日本薬学会など所属学会のリーダとして活躍しています。また、研究成果に対し、最近では日本薬学会賞、シクロデキストリン学会賞、日本細菌学会の浅川賞、文部科学大臣賞などが授与され高い評価を受けています。

医学部や看護学部のある亥鼻キャンパスへの移転は15年ほど前から検討されておりました。平成16年の一期棟への移転を経て、平成18年の薬学6年制導入の後押しもあり、今回の全面移転が実現しました。薬学部では、創薬研究の発展と研究者養成、さらに医療現場で活躍する人材を輩出するという大きな使命を持っています。亥鼻キャンパスへの移転によって、薬学研究の発展という面では、医学部や真菌医学研究センターとの共同研究が、高度な薬剤師の輩出という面では、医学部、看護学部とともにチーム医療が学べるという点に大きな期待を感じています。特に薬剤師は薬の知識だけではなく、それを現場で生かすためのコミュニケーション能力や対応力が求められています。医学部、看護学部の学生との交流や医学部附属病院での実習を通して、それぞれの立場や役割を肌で感じることは、今後、医療現場で仕事をすることで役立つものと考えております。

また、学生の国際的な活躍を視野に入れて、英語教育にも力を入れています。TOEIC730点という高いレベルを求めており、卒業までにキャンパス内で三回の受験を課しているほか、海外の学生との交換留学なども積極的に進めています。

千葉大学薬学部の学生は皆、高い基礎能力と、粘り強く研究を続ける心が備わっています。是非、その能力を積極的に外に出し、医・薬・看が集合した「亥鼻ブランド」の柱となるよう、頑張ることを期待しています。

医薬系総合研究棟Ⅱ竣工記念事業

平成23年11月2日（水）に医薬系総合研究棟Ⅱ竣工記念事業として、記念式典、施設見学及び記念祝賀会がおこなわれました。

薬学部120周年記念講堂でおこなわれた記念式典は、広い講堂がほぼ満席となり盛大に執り行われました。式典のあとは、新棟の真新しい施設の見学会がおこなわれ、来賓の方々も最新鋭の実験施設などを熱心に見学されました。夕方からの記念祝賀会にも大勢の方々にご参加いただき、竣工記念事業は盛況のうちは無事閉会を迎えることができました。



記念式典 西田篤司薬学研究院長挨拶



記念式典 中谷晴昭医学研究院長挨拶



実験施設の見学会



記念祝賀会 山本友子医学薬学部長挨拶

たちが内します!



合成化学研究室です。教名、学生10名でそのうち名が中国からの留学生で天然から摂れる有機化合物的に合成するとともに化学反応を開発するをおこなっています。この居室と実験室が分かれて士になっています。実験化学反応により発生するの有害ガスから身を守るため、実験デスクの前に強制排気システムにより性が確保されています。



化学研究室



のように廊下に掲げられた研究がどこまであるか、他の学生が研究をしているのかがわかります。



研究を担う若手教員



分子心血管薬理学研究室 高野 博之（教授）

私は心不全の病態解明と新規治療法の開発をおこなっています。心不全とは心臓の働きが低下する状態を言います。心不全発症の分子機序はまだ十分に解明されていません。これまで心不全の病態を調べるために、心機能に関連のある分子の遺伝子改変マウスを作製して研究してきました。さらに、病態に基づいた新たな治療法の開発を目指してきました。顆粒球コロニー刺激因子などの造血性サイトカインが心不全を強力に抑制することを基礎研究で明らかにし、詳細な作用機序を世界で初めて報告しました。現在、臨床研究を実施し人での効果と安全性を検証しています。

若いうちは失敗を恐れず何事にもチャレンジしてください。グローバルな視野を持ったリーダーとして各分野で活躍されることを期待しています。



活性構造化学研究室 荒井 緑（准教授）

私は神経幹細胞を活性化させる神経再生薬リードを、天然物を基盤として創製する研究をしています。タンパク質を用いて魚釣りのように釣り上げた天然物や、「天然物の構造（神）+人の発想」で化学合成した化合物は、神経幹細胞の分化を速め、神経突起を長く伸ばしました。神経を再生させたという意欲で有機化学と遺伝子や細胞実験を学び今の研究をしています。

ぜひ千葉大学で皆さんの研究への興味を、二ユーロンのように長く広く伸ばして下さい。

医薬系総合研究棟Ⅱ



「安全で快適な施設設備」、「フレキシブルな実験研究スペースの整備」、「環境負担低減に配慮した施設」、この3つのコンセプトにより設計されました。

沿革



講義実習（大正4年）



千葉医学専門学校薬学科新校舎（大正7年）



亥鼻校舎（昭和3年）

明治23年7月 第一高等学校に薬学科が付設される（亥鼻地区）。
 明治27年9月 高等学校令の改正により、第一高等学校校医学科薬学科となる。
 明治34年4月 千葉医学専門学校薬学科に改称。
 大正12年4月 千葉医科大学附属薬学専ら門部と改称。
 昭和6年11月 校舎新築移転。
 昭和24年5月 国立学校設置法が公布され千葉大学が設置され薬学部（男女共学4年制）が置かれる。（初代学部長宮木高明教授、学年定員40名。
 昭和31年4月 薬学専攻科が設置される。（修業年限1カ年）

昭和39年4月 大学院薬学研究科修士課程が設置され薬学専攻科が廃止される。
 昭和41年4月 製薬化学科が増設され2学科80名となる。
 昭和41年7月 西千葉地区に竣工した新校舎に移転。
 昭和45年4月 大学院薬学研究科修士課程に製薬化学専攻が増設される。
 昭和51年5月 附属薬用植物園を設置。
 昭和54年4月 薬学科、製薬化学科が総合薬品科学科に改組される。
 昭和57年3月 大学院薬学研究科博士課程が設置される。
 大学院講義室・研究棟竣工。



昭和16年の校舎にあった屋根飾り



定性分析の学生実習（昭和22年）



薬学部（旧医学部）正門（昭和38年）

平成元年3月 薬学部4号館が完成。
 平成元年7月 薬学部創立百周年記念式典と祝賀会が挙行される。
 平成元年11月 百周年記念館が完成。
 平成2年10月 千葉大学薬学部同窓会が発展的に解消して、教職員を含む新しい同窓会組織としての薬友会が発足する。
 平成6年6月 附属薬用資源教育研究センターが設置される。
 平成9年4月 大学院薬学研究科に医療薬学専攻が設置される。



矢作地区に移転した校舎（昭和36年）



薬学部講義も完成した西千葉校舎（昭和42年）

平成13年4月 大学院薬学研究科と大学院医学研究科を改組し、大学院教育組織として医学薬学融合型の大学院医学薬学府と、大学院研究組織として大学院薬学研究科が設置される。
 平成16年4月 亥鼻地区に医薬系総合研究棟（第一期工事）が竣工。
 平成18年4月 薬学6年制導入に伴い、総合薬品科学科を薬学40名に改組。
 平成22年7月 千葉大学薬学部創立120年。
 平成23年9月 亥鼻地区に医薬系総合研究棟（第二期工事）が竣工。新校舎に移転。



西千葉キャンパス薬学部1号館、講義、講義棟（平成元年）



西千葉キャンパス薬学部2、3、4号館（平成元年）



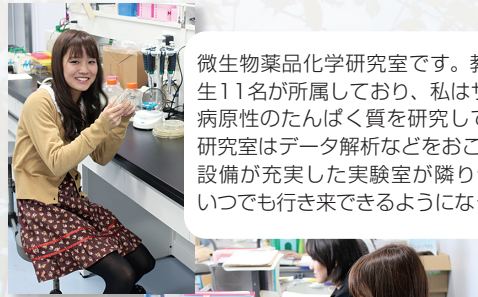
講義実習（平成元年）

学生が案内する新棟めぐり



正面玄関

正面玄関のホールです。移転することは以前から決まっていたのですが、ようやくここに来れたという感じです。真新しい壁には館内案内や掲示板などが設置されています。



微生物薬品化学研究室

微生物薬品化学研究室です。教員3名、学生11名が所属しており、私はサルモネラの病原性のたんぱく質を研究しています。各研究室はデータ解析などをおこなう居室と、設備が充実した実験室が隣り合っており、いつでも行き来できるようになっています。



ベランダ

各階にあるベランダです。ここからは千葉城も見えるし、意外と近くに千葉港、ポートタワーを見ることもできるので、気分転換にもちょうどいい場所です。亥鼻地区は小高くなっており、千葉市の中でもひととき緑が多いことを感じることができます。

旧猪之鼻学舎の屋根飾りは今回の移転で西千葉キャンパスから移された薬学部の象徴と言えるものです。元々薬学部は亥鼻にありましたので屋根飾りは里帰りと言うことになります。このような伝統を感じさせる建物もそうですが、その歴史を先生に教えていただいたり、驚くほど多くのOBの方々がいらっしやったり、120年と言う歴史の重みを感じています。

屋根飾り



研究成果はご示します。自分で進行しているどのような研究を知ることが



ラウンジ

各階の階段近くにはラウンジがあります。このスペースは各学部にあるリフレッシュルームと同じ役割のユーティリティスペースです。教員も学生も忙しい研究活動が一段落したらここでくつろいで英気を養います。採光の工夫がされていて明るい癒しスポットになっていますので、皆さんもぜひ利用してみてください。

120周年記念講堂は302席もの収容人数を誇る最新鋭の大型スペースです。とにかく広くて綺麗で薬学部自慢の場所です。中段にも大型モニターが設置されており、亥鼻IPE（医薬看の共同授業）、各種発表会、講演会、公開講座などに利用されます。

記念講堂



山崎 真巳（准教授）

人類は古くから自然界の動植物を薬として利用してきました。現代でも多くの薬が天然化合物をもとに製造されます。特に植物は多様な物質の生産者として重要です。そこで私は植物が有用物質を生産するしくみを分子生物学的に研究しています。それと同時に、物質生産の生物学的意義や生態や進化との関係を明らかにしたいと思います。今わかっていない興味を持った少しねばってみましょう。今わかってなくても糸口はどこかにあると思います。

遺伝子資源応用研究室



森部久仁一（准教授）

私は水に殆ど溶けない薬を溶かすために、ナノサイズの微粒子にしたり、溶解補助剤と複合体を形成させたりして、患者さんに投与可能な製剤を作る研究をしています。ナノテクノロジーの進歩により、分子レベルで構造が評価できるようになり、薬の構造に適した製剤開発が期待されます。研究では、仮説を立てそれを検証する作業の繰り返しの中でのみ真実がみえてきます。基本は大切です。自ら考えて判断し自分の意見を主張できる筋の通った若者が多数でいることを期待しています。

製剤工学研究室

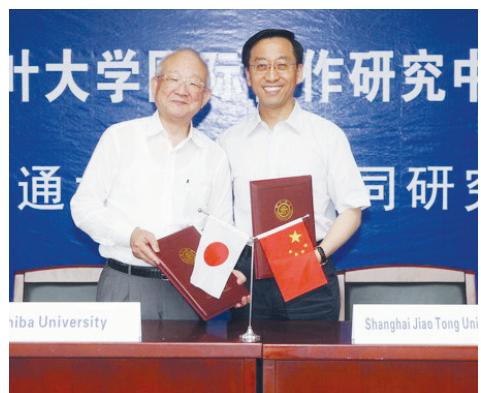
TOPICS

「千葉大学・上海交通大学国際共同研究センター」を設立

国際性及び創造性豊かな次世代のリーダーとなる人材育成をめざして、「千葉大学・上海交通大学国際共同研究センター」が設立されました。

2011年7月8日、上海交通大学において、「千葉大学・上海交通大学国際共同研究センター」の開所式が行われました。同センターは、それぞれの大学における全学レベルの教育研究組織です。共同管理体制の下、両大学の教員が連携して先端的・先導的な学術研究や、産学連携による研究開発を実施するほか、国際性豊かな次世代リーダーの育成をめざして、相互に大学院生を受け入れる協働教育を行うことが決定しています。

今後、学生は相手側の大学に4ヶ月〜1年間滞在して、現地大学の教員による指導を受けながら研究を実施し、英語による授業で単位を取



協定書署名式の様子
(左：齋藤康千葉大学長、右：張杰上海交通大学長)

得することができるほか、所定の単位を取得すれば、千葉大学と上海交通大学の双方から学位（博士）が授与されることとなります。国際化に向け、ますます学生の学びの場所が広がるものと期待されています。

農林水産省・植物工場への取り組み

環境健康フィールド科学センター

農林水産省による「モデルハウス型植物工場実証・展示・研修事業」の拠点として採択された千葉大学の活動を紹介します。

千葉大学では、太陽光利用型施設、完全人工光型施設および実証・研修施設を設置しました。それぞれの施設では、実証参加機関（民間事業者や研究者から成るグループで、実際に当該施設において実証を行う機関）がかわり、目標を達成するための研究開発を実施します。この事業を通じて、植物工場に関心を抱いている企業・研究機関・生産者団体・普及機関等と更なる連携を深め、産業及び地域経済の発展に寄与すべく活動を行っています。

- 【事業の概要】
- 1 太陽光利用型5コンソーシアムによるトマト高収量生産システムの実証
 - 2 完全人工光型2コンソーシアムによるレタスの低コスト生産システム実証
 - 3 共通技術の実証
 - 4 横断型コンソーシアムによる共用データベース構築と植物工場経営最適化支援に関する研修・普及
 - 5 展示・研修施設



施設内の様子



人工光栽培風景

みどりの学術賞を受賞！

田畑貞壽 名誉教授

国内において植物、森林、緑地、造園、自然保護等に関する研究、技術の開発その他「みどり」に関する学術上の顕著な功績のあった個人に内閣総理大臣が授与する「みどりの学術賞 (The MIDORI Academic Prize)」を、千葉大学の田畑名誉教授が受賞しました。

今回の受賞は、樹林、草原、水辺、湿地、農地、並木、公園、庭園、生垣、屋敷林などを「緑被地」として抽出する方法を考案したことへの評価です。田畑名誉教授は、この「緑被地」の考えを基に、コミュニティ、都市、農村など各種地域の「緑被地図」を作成し、「緑被地率」や「緑被率」を計測。緑被地率と都市開発など地域変容との関係性、歴史の変遷とその要因、傾斜度と残存緑被地率の関係などを考察することで「緑被地構造」を解明しました。また、緑被地率と人口密度、緑被地率と呼吸器系疾患、緑被地率と小動物の生息、緑被地率と地下水位との関係についても強い相関性があることも解明されました。

さらに、緑被地の分布形や、緑被地率による環境保全機能、ヒートアイランド現象の緩和作用、防火・防災などさまざまな側面から計測、調査、分析した上で、居住環境を快適に保つための基本原則を導き整理されています。

田畑名誉教授の受賞を心からお祝いするとともに、今後の活躍をお祈りしています。



授賞式会場での田畑貞壽名誉教授

オープンキャンパスを実施しました！

オープンキャンパスは、高校生の皆さんが千葉大学に触れる最初の一步です。各学部・センターとも少しでも多く千葉大学を知っていただけるよう、趣向を凝らした企画で参加者を迎えました。

千葉大学では毎年7〜8月の大学祭期間に、各学部・センターでオープンキャンパスを実施しています。オープンキャンパスとは、主に高校生で千葉大学を目指す方々に、大学の方針や仕組みをご理解いただき、さらに実際に入学してからの教室や研究室、その他の設備を体験していただくためのイベントです。

夏のオープンキャンパスではほとんどの学部で所属の教員による模擬講義がおこなわれ、短い時間ですが大学の本物の講義を体験することもできます。今年は7月21日（木）の医学部を皮切りに、8月7日（日）の理学部まで、9学部と先進科学プログラム（飛び入学）で開催され、どの会場も大変な熱気に包まれていました。

- オープンキャンパスのメニュー（例）
- ・ 学部紹介（全体説明とビデオ等）
 - ・ 学科もしくは課程の概要、カリキュラム
 - ・ 卒業後の進路
 - ・ 在学生による学生生活の紹介
 - ・ 模擬授業
 - ・ 施設見学
 - ・ 進学相談（個別）

秋のオープンキャンパスは各学部で大学概要説明会、現役学生等による入学相談会を中心に、公開講座や模擬授業がおこなわれた学部もありました。

夏のオープンキャンパス



全体説明会
模擬授業
入学相談会
施設見学
進学相談

秋のオープンキャンパス



オープンキャンパス受付
入学相談会

千葉大学が誇る名物講義！

第2回 学校と教育（教育学部）
担当：藤川大祐先生

担当教員のプロフィール

千葉大学教育学部教授（教育方法学・授業実践開発）
1965年、東京生まれ。東京大学大学院教育学研究科博士課程単位取得満期退学（教育学修士）。金城学院大学助教授を経て、2001年より千葉大学勤務。2010年より千葉大学教授。2010年度千葉大学学長特別補佐（大学改革を担当）。地元・千葉ではNPO法人「企業教育研究会」を発足させ、企業やアーティストと連携した授業づくりを進めています。



講義レポート

毎回出席することから始まるこの講義。その日のメインとなる学習内容に加え、教育に関する最近の話などを取り上げたコーナーも充実しています。授業のメイン部分では、教育の具体的な問題を映像や写真を使って紹介しており、藤川先生の軽妙かつ、身近なテレビ番組などを例にしたトークで、学生はいつの間にか授業に引き込まれていきます。自ら挙手して発表する学生の姿が多いのも印象的でした。

さらに、この講義では、ツイッターの活用や携帯やPCでの情報収集もOK。より多くの情報を得て発信することで、学生は積極的に授業に関与することができるのです。

講義紹介

教育学の入門的講義である「学校と教育」では、教育実践及び教育課程について、具体的な事例を通して理解を深めていきます。映像や学生同士の話し合いの時間を通して、教育の理念、歴史、思想を考察していきます。

1年次の必修科目ですので、基本的なことを押さえてつつ新しいことを取り入れながら進めていきます。問題・課題を自分で引き付けて考え、自分で解決策を考えられるようになってほしいという意図から話し合いや発表を重視。さらに、自問自答を喚起する、読書の習慣をつける、報道を見るなど、学びの姿勢を持つための基本的な習慣付けにつながる取り組みも進めています。

担当教員からのメッセージ

教育学とはいわば雑学であり、幅広い学際的な知識が求められます。学生は基本的に読書量も実験も足りませんから、多くの本を読み（目安として、1ヶ月に定価一万円の本を読むことを薦めています）、さまざまな体験をしてほしいと考えています。教育については実践的に学ぶことが必要ですので、この講義でも教育方法学研究成果をふんだんに活かしています。私の授業の工夫からも教育について学んでもらいたいと考えています。

時代は急激に変化しています。最新の情報技術にも関心をもっとほしいとの考えから、この授業では、YouTubeやツイッターなどを無理のない範囲で活用するようにしています。

学生からのコメント

小学校教員養成課程社会科必修
1年 三村怜夢さん
実際のビデオや様子を見て、課題に取り組むため、実感が湧き真剣に向き合おうという意欲が出てきます。携帯電話やPCを使って情報を集めるなど、講義スタイルも工夫されており、毎回楽しみにしている講義の一つです。

小学校教員養成課程国語科必修
1年 松本健太郎さん
私たちは、まだ小中学校での実際の授業を見る機会がないので、映像を見ることによってより身近に感じることができました。藤川先生の考える「教員のあるべき姿」が講義に取り入れられているのが、とても参考になります。非常に熱く、印象的な先生です。



具体例は映像を見ながら



学生から活発な意見が出てきます